

空白の2週間

「3年連続受ひょう(雹)」(5月29日)のあと、2週間あまり、畑の作業ノートが空白です。いつにもまして、余裕がなかったようです。6月5日からの1週間は、寄居町でも合計400ミリくらい(一年間の降水量の3分の1ほど)という、前代未聞の大雨続き。作付けができないのはもちろん、収穫にも大変難儀しました。野菜があると



ところにたどりつくために、コンテナを置いて、長靴が沈まないようにカンジキのように台にして、もう一つのコンテナを前に置いて、進む、というようなことまでしました。

大雨に降り込められて、多くの野菜は生育せず、人参などは、7、8割が地中で腐ってしまいました。その前の乾きで、長く伸びていた根の先から、窒息死したもようです。

それでも、14日には、息子と友人の手伝いを得て、恒例の麦ワラ集めを集中的にやりきりました。写真は、来

年用のストックに、畑に積み上げているところです。左が、友人のOさん。

そして、21日には、うちの小麦の刈取りも終了。下の写真は、20mほどの長さのハウスの中で、天日乾燥しているところ。毎日、大気が不安定ですので、ハウスのサイドを閉めたり開けたりしています。



このハウス、写真ではよくわかりませんが、2月の雪害で、骨がゆがんでいます。隣の、大きく押しつぶされたもう1棟のハウスとともに、秋には撤去しなければなりません。最後のお仕事です。

公的支援は誰の手に

雪害と言えば、公的支援を受けるために、この間も役場に行ったり、書類を作ったり、地主さんに頼んで農業委員会を通じた正式な賃貸契約を交わしたり、と、色々な作業が必要でした。でも、やればやるほど、うちが支援してもらえることは減っていくばかりです。以前、たよりで写真を載せた、単管パイプ(足場パイプ)で作った倉庫は、支援が認められないことになりました。建築確認が必要なんだそうです。壊れた鶏舎も、山林に建っているの、対象外です。近所の仲間も、正式な契約がないので、最初から支援はあきらめている人が複数います。ということで、借地で小さくやっているものほど、支援の網からこぼれていく、というのが現実のようです。



そのうえ、この天候。大きくやっている人でも、大変です。たとえば、雪害でハウスが壊れた上に、この大雨で、大麦が発芽して収穫できなくなった、という地域もあるようです。農業共済に加入していると、そういう天災の際の補償は出るようですが、気持ちを支えるのはむずかしいのではないかと、思います。

さて、気を取り直して、右は「夏の装い」の私です。(6月23日 泰子)

